

私たちの国の政府は今年2月、これまでの方針を転換し、「原発の最大限活用」を閣議決定した。その主な理由は「化石燃料から、温室効果ガスを排出しないクリーンエネルギーへの転換」だという。すなわち、このまま地球温暖化を受け入れるか、それが嫌なら原子力発電にたよるか、という二者択一を掲げ、後者の選択を国民に迫るという構図である。

たしかに温暖化の進行は、すでに私たちの生活を直接脅かすに至っている。例えば、昨年末、佐渡島は前例のないドカ雪におそわれた。これは日本海の海水温上昇によるもので、湿った重い降雪のため、島内の広い範囲で竹林が倒伏した。そのため各地で電線が寸断し道路もふさがれ、結果、多くの島民が厳冬のなか孤立し、長期の停電に耐えることを強いられた。

このような温暖化の実害が増すほどに、先ほどの二者択一の設定は、国民の支持を原発回帰に流し込む仕掛けとして働くことになる。

しかし果たして、この二択は正当なものといえるのだろうか。私にはこの二択設定の仕様が、見覚えあるものとして映る。既視感がある。やはり政治的な意図を含んだ現代

史上の出来事として。それが同じく「核」をめぐる経験であったのは偶然であろうか。

広島、長崎への原子爆弾投下は、それ以前からアメリカ政府内でも慎重論があった。投下後かの国では宗教界をはじめ、保守、リベラルを問わ

択設定は、しかし少しの熟慮があれば、より広い選択肢のバリエーションのほんの一部に過ぎないことがわかる。普通の生活者が何十万人も暮らす都市の頭上で核兵器を炸裂させること。そのおびただしい惨禍を経ることなく戦争を終了させる方法は、戦局の圧倒的に有利な側に立つ者にとっては、いくらでもあったはずだ。

戦後の大国間の力学を予見し、原爆使用の本当の目的は別にあつた。にもかかわらず、掲げられた恣意的な二択によって、原爆使用の不条理はかの国の市民の良識から糊塗されたのである。

地球温暖化か。それとも原発回帰か。いま、私たちの目前におかれたこの二択設定は、原爆投下をめぐるアメリカ政府の、国内外世論に対する誘導とよく似ている。あの時、原爆を使いたかった人たちがいたように、今、原発を再稼働させたい人たちがいる。その理由があるからだろう。

しかしごくほんの一例だけあげても、原発から出る放射性廃棄物の処分策はいまだに定まっていない。にもかかわらず特定の意図のもとになされる、根拠不明瞭で狭隘な二択の前に、私たちは閉じ込められてはならない。

二択設定の陥穽

かんせい

十文字 修

(じゅうもんじ) おさむ

新潟県佐渡島在住

ずメディアからも批判の声が沸き起こった。それを効果的に鎮静化させたのは、良く知られる次の二者択一のレトリックだった。

「原爆の使用による日本の降伏か。それとも日本本土上陸作戦による百万以上のアメリカ軍兵士の死傷か。前者によって後者が救われた」。参考：中沢志保『ヘンリー・スティムソンと「アメリカの世紀」』他

このように単純化された二